

3W-1

望ましい要求分析のあり方

—要求分析作業手順の確立を目指して—

ラージシステム研究会(富士通(株)大型機ユーザ会)  
梅本 賢次(株)東レシステムセンター)

1. はじめに

要求分析はシステム開発の最初の工程であり、それによりシステムの方向づけが行われる重要な工程である。しかしながらその手順、方法については確立されたものが無く、分析者の経験や勘にたよっているのが現状である。

そこで、だれもが簡単に、もれなく、分析作業ができることを目指し、「標準要求分析作業手順書」を作成することとした。なお、本論文は、富士通(株)の大型機ユーザで構成されるラージシステム研究会の研究成果にもとづいて発表するものである。

2. 手順化への二つのアプローチ

手順化にあたり、二つの方向からアプローチを試みた。ひとつはエンドユーザから見た要求分析のあり方、もうひとつはDPサイドから見て、システム設計へスムーズにつなげるための要求分析のあり方である。

その方向性および対象範囲を図1に示す。

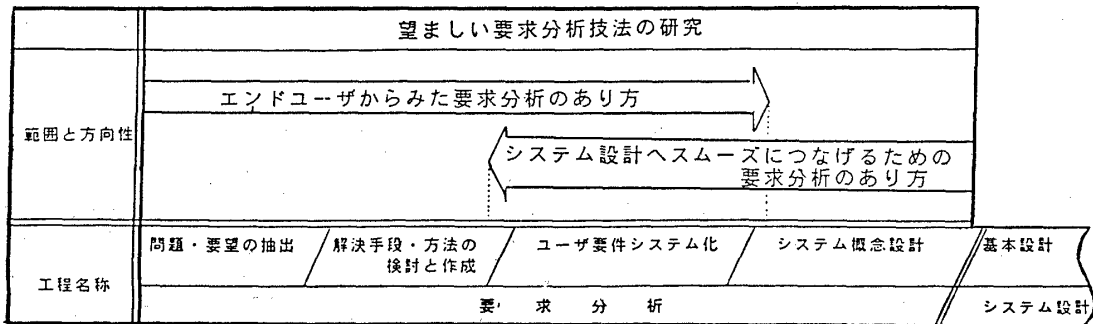


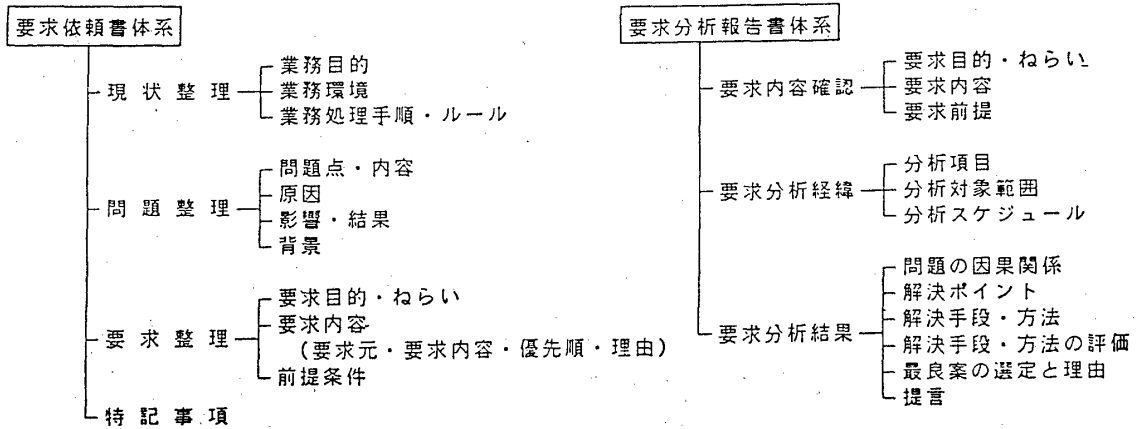
図1. 対象範囲と方向性

(1) エンドユーザから見た要求分析のあり方

システム開発工程全般において、エンドユーザの積極的参加が望まれるが、特に要求分析工程はエンドユーザ、DP部門一体となり作業を進め、意志統一を図ることが重要である。それにはまず、要求分析依頼時点でユーザニーズをもれなく正確に抽出し、さらに分析の過程、結果をエンドユーザに理解しやすく納得できる形で伝える必要がある。そこで今回、エンドユーザが記入しやすい「要求依頼書」、エンドユーザが理解しやすい「要求分析報告書」の体系化を図った。

特に「要求依頼書」については設問形式とし、エンドユーザが設問に沿って、フォームシートに記入することにより、現状整理、問題整理、要求整理を行えるよう工夫した。また、「要求分析報告書」では解決手段として安易にコンピュータ化を指向するのではなく、広義のシステムとの観点から、コンピュータの役割分担を明確に示せるよう工夫した。

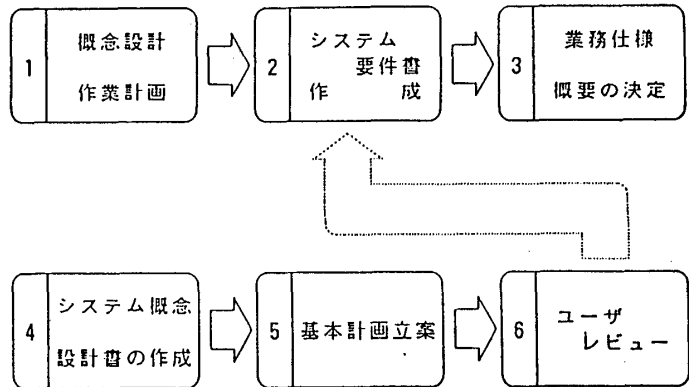
なお「要求依頼書」、「要求分析報告書」の体系は次のとおりである。



(2) システム設計へスムーズにつながるための要求分析のあり方

従来、要求分析作業において、解決手段としての具体的なイメージが、ユーザに示されないままシステム設計に着手していた。また設計工程以降はDP部門が主体でありエンドユーザはレビュー、検証に参加するにすぎなかった。この結果、ユーザニーズが十分システム反映されず、仕様変更が多発しているのが実情である。これらの問題を解消するため、要求分析工程の中にシステムのアウトラインを明確に示すための工程、すなわちシステム概念設計工程を設定した。その作業項目（フェーズ）を洗い出し図2の手順化を行った。さらにそれをより具体的な詳細作業項目（アクティビティ）にブレイクダウンし、アクティビティごとに入出力情報を明確にすることにより作業内容を具体化して「システム概念設計標準手順書」として完成させた。

図2 システム概念設計作業フロー



3. 標準要求分析作業手順書の集大成

以上二つの観点に立ち作成されたドキュメントを整理し、図3のとおり体系化を行い、「標準要求分析作業手順書」として集大成した。

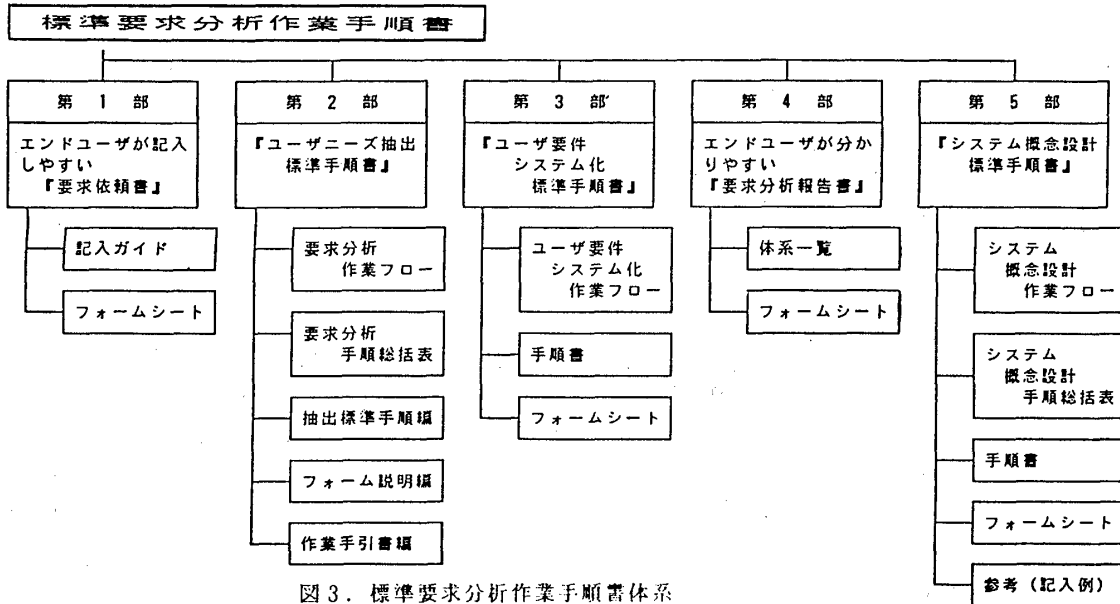


図3. 標準要求分析作業手順書体系

この中の「ユーザニーズ抽出標準手順書」、「ユーザ要件システム化標準手順書」、「システム概念設計標準手順書」により、だれにでも、もれなくユーザニーズが抽出でき、さらにシステム設計へスムーズにつながっていくことができる。またエンドユーザが記入しやすい「要求依頼書」、エンドユーザが分かりやすい「要求分析報告書」により、これまでDPサイドで要求分析を行うという立場から、エンドユーザサイドに立った要求分析ができるようになった。

その結果、エンドユーザとのコミュニケーションギャップが無くなり要求分析作業の効率化、要求分析結果の精度向上が得られ、望ましい要求分析が行えることを確信する。

4. おわりに

今回作成した手順書はあくまでも標準パターンであり、フォームシートもかなりの量となっている。業種、規模等により手順が異なることは十分考えられる。実務への適用に当っては業種規模等のパターンにより取捨選択することをお薦めする。なお、パターン別手順については現在ラージシステム研究会において研究が継続されている。

共同研究者は、金子真理（株）伊勢丹、真山隆徳（川崎製鉄（株））、野上勲（株）関東データセンター）、岡本聡（神戸コンピュータサービス）、沢田敏郎（同）、関弘康（サントリー（株））、土井雄二（新日本製鉄（株））、松下修司（セイコー電子工業（株））、笠井誠（株）西武情報センター）、宮田誠功（株）第一勧業銀行）、井上隆（トビー工業（株））、石川光章（株）ニチイ）、古橋義郎（日本化薬（株））、梶野徹（野村コンピュータシステム（株））、井上利一郎（株）間組）、岸田卓（松下電工（株））、大久保定義（三井石油化学工業（株））である。

（参考文献）

- ・ラージシステム研究会「分科会研究活動報告書」昭和60年度（1986）
- ・同別冊「標準要求分析作業手順書」（1986）